翻　訳

描画の発達的理解
DEVELOPMENTAL ASPECTS OF DRAWINGS

翻訳者　大　辻　隆　夫*　松　葉　健　太　朗**

【解　説】

この翻訳は，Lynne Cantlay, Ph. D,. Detecting Child Abuse; Recognizing Children at Risk through Drawings, Holly Press, Santa Barbara, CA.（1996）のChap. 2 Developmental Aspects of Drawingsを訳出したものである。本書については既にChap. 3 Analyzing Drawingsが描画分析技法として大辻によって訳出されている（大辻，2001）。

この第3章で原著者Cantlayは，描画分析における第1印象（first impression），つまり描画分析者の主観的次元に関する情報の重要性を指摘している。それは，描画がそれを見た者（描画分析者）に引き起こす感情がしばしば描画者の感情を映し出すからである。精神分析者のBlos（1972）が彼の臨床事例において患者を前にして分析者が感じる感情がしばしば患者が分析者に伝えたい感情であるということについて述べているが，これは，描画分析者であれ精神分析者であれいずれの場合においても，分析者における正確な共感能力の重要性を指摘しているに他ならない。またCantlayは，描画分析の臨床査定において，印象分析法にタイアップさせて項目分析法を用いることの有効性も強調している。この分析法については，比較的これまで知られている方法であり，ことさら取り上げて説明するほどのことでもないのだが，原著者（本書）のユニークなところは，その分析項目がトラウマ指標に体系化されているところにある。このことが被虐待児童の早期発見において極めて優れたツールとして機能するところに本書の価値のひとつが見出せると言えよう。ちなみに描画分析技法としては，上記2技法に加えて，関係年齢分析法，および象徴解釈法があることも忘れてはならない。

さて今回取り上げるChap. 2 Developmental Aspects of Drawings（第2章　描画の発達的理解）は，描画の発達的側面に注目したもので，描画の発達臨床に関する記述を中心とする章である。ここでは，まず第1に描画の発達年齢水準と描画者の実年齢との不一致を問題にしている。原著者のCantlayも述べているように，不一致が必ずしもトラウマを意味するものではなく，読者はそこに描画者である子どもの心身の不調を読み取るべきであり，またやみくもにすべての不一致を取り上げる必要はなく，たとえば12歳児が4歳児のような絵を描いたとき，あるいはまた3歳児が4歳児のような描画を行ったときに描画者である子どもを慎重に観察する必要があることを指摘している。これについては，読者はCantlayの描画臨床例，①3歳児のような描画をする7歳児Tomの事例，②早熟な7歳児Annieの事例，および③両親の離婚が受け入れられない9歳児Davidの事例をご覧いただきたい。

次にCantlayは，いわゆる発達画について下記に示す各年齢発達段階を特徴づける描画を提示して説明している。

＊京都女子大学家政学部助教授（児童教育学）
Takao Otsuji
＊＊奈良県立高円高等学校
Kentaro Matsuba

①18ヶ月－2歳半児の描画
②3歳児の描画
③4歳－7歳児の描画
④7歳－10歳児の描画
⑤9歳－10歳児の描画
⑥前青年期（11歳－12歳児）の描画

このような描画例とその説明により，読者は子どもの健康な描画表現の範囲と程度についてのガイドラインを知ることができよう。

なお原著者Cantlayについては，前著（大辻，2001）をご覧いただきたい。

【翻　訳】

発達的に不適切な描画についての理解が深まれば，不安に対する行動上および他のサインに対しての感受性が急速に高まるであろう。そのとき読者は早い段階で家族の相談に乗り，行動が破壊的になる前に専門的な査定を受けることを提言することができる。この章は発達水準に関する情報と，子どもの年齢に適合した描画とそれに不適合な描画とは何かということについて示すものである。

不一致

描画における危険信号は描画の発達年齢水準と描画者の実年齢間の差異である。子どもは通常，暦年齢に応じて描くものである。もし差が見られるならそこに注目することが大切である。**子どもの年齢とその描画水準間の明らかな不一致は検討しなければならない。**

不一致に寄与する重要な要因について以下にリストアップし，この章で論じた：

1）年齢相応の描画からより未熟な発達水準への変化。
2）均衡の取れた人物から不均衡で不完全な身体への変化。
3）適切な表象から透明で非現実的な表象への変化。
4）家および/もしくは木における完全な表象から基本特徴の欠如への変化。
5）表象画からかなり未分化な描画への変化。
6）これまで描画の明瞭化を必要としなかったにもかかわらず，観察者がその明瞭化を求める場合。

これらの変化は問題を示す。不一致の理由は描画を分析するときに認識されるはずである。不一致は生理学的問題，心理学的問題，環境的状況，あるいはこれらの組み合わせから生じる問題から生まれる。それゆえに子どもを評価し，問題の性質を決定することは重要である。

不一致は必ずしもトラウマを意味するものではないが，しかしそれらは何かが悪いと言うことを示すものであり，観察をするに値する。あらゆる不一致に注目すべきと言うものでもない。一般常識は5歳児のような描画を行う12歳児が問題を持っている可能性があること，4歳児のように描画を行う3歳児が発達的に進んでいることを示唆するであろう。

次に示す事例研究は描画における不一致とともに見られるさまざまな行動を示す。これらの不一致や行動型は実際上検討すべき潜在的な問題を示した。

事例研究1

Tomは聡明で魅力的な7歳児であるが，授業中に「アクティング・アウト」を始めた。普段とてもはにかみ屋の子どもであったが，衝動的で自己の暴発をコントロールできなくなった。彼は落ち着きがなく，クラスメートを押したり，悪口を言うことで敵意を表出した。状況は最終的に担任と校長がTomを退学させることを検討するところまで行った。

Tomの描画はとても未熟なものであった。彼は頭のみを描くことによって自己や家族の絵を描いた。彼が描いた他の対象はすぐに見分けることができなかった。彼の描画は典型的な3歳児のものだった。両親との面接において，彼が3歳のときに家庭で何が起こっていたかについて探求した。両親はTomが目の矯正手術で3週間入院していたことを思い出した。入院による強制的な分離はTomのトラウマになった。そして彼は退院後も夜驚症を示した。

両親と話しているときに彼らが1ヶ月間の長期ヨーロッパ旅行を計画していることが分かった。これがTomの遺棄恐怖を再刺激していた。

それは彼が3歳のときに経験していた恐怖と同一であった。セラピーのときにこの問題について話し合ったところ彼はリラックスした。Tomのアクティング・アウト行動は停止し，彼の描画は年齢相応になった。彼の最後の描画は十分に均衡が取れているものであり，すべての人物には体が描かれていた。その他のものは簡単に見分けがついた。

事例研究 2

Annieはとても早熟な7歳児で授業中に「アクティング・アウト」やわいせつな性的発言を始めた。彼女の描画は十分に均衡の取れた人物から，不均衡で不完全な描画へと変化した。透明画（X線のような力）が彼女のあらゆる描画に見られるが，多くの対象は認識できないものだった。

彼女の両親との話し合いで，Annieが4歳のとき保育園で性的虐待が起こっていることが発覚し，園が閉園されたことが明らかになった。両親はAnnieが何もなかったと報告したので虐待から守られていたと信じていた。しかし実際彼女が虐待されていたことがセラピーにおいて明らかになった。彼女は攻撃的で性的な早熟行動を通して，怒りと混乱の感情を表現した。数ヵ月後のセラピーの後，Annieは年齢相応の描画を描くようになっていた。そしてクラスでの行動も正常に戻った。

事例研究 3

Davidは9歳で非常に気分屋であり，また極端に受身的であった。彼の担任が，彼が「甘えん坊」で「アクティング・アウト」をしないが，変わったことは明らかだと報告した。彼は自己の感情について話すことを拒否して引きこもった。授業に出席することや同級生と遊ぶことをやめた。彼は5歳レベルの描画を行った。自画像は初歩的なもので環境表現は非現実的であった。

Davidの両親は彼が5歳のときに離婚した。彼は4年経過しても依然として両親の離婚を受け入れることができなかった。父は最近再婚したが，しかしDavidは「お父さんとお母さんがまた一緒に暮らすときが…」などと話し続けた。

Davidのうつのきっかけは，彼の父の再婚を受け入れることができないことであった。セラピーにおいてDavidは，最終的には両親の離婚と父の再婚にまつわる感情を表現することができた。彼は自己の怒りと悲しみを受け入れ，表現することを学んだ。彼のうつは軽減し，普段の生活に戻った。

各年齢における発達水準

発達水準は年齢によって明確にされる。すべての確立されたパターンに見られるように，子どもたちは独自の発達スケジュールに沿って成長していく。しかしながらたいていの子どもたちは正常な範囲に適合していくものである。描画が発達年齢に適合したものであるべきだと言うことを認識することは重要である（Kellogg, 1970； Klepsch and Logie, 1982）。

この簡単な発達の輪郭は，各年齢水準における子どもの正常な能力に関する基本概念を提供する。年齢適合性に関する理解は知的であれ，情動的であれ，退行を決定する際に不可欠である。もし子どもが生活上のストレスないしはトラウマのためにより若年の水準の描画に退行するならば，そのストレスが排除されるとき，一般的にその描画は適合年齢水準に回復するだろう。

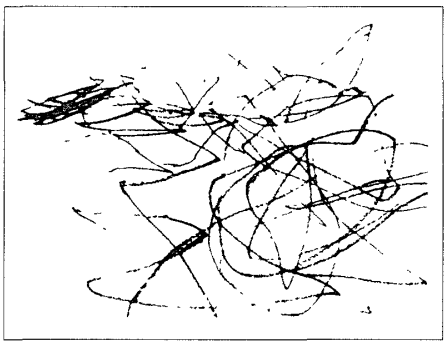
次の発達水準は単純な形式で提示される。多くの介護者と教師はほぼ同年齢の子ども集団の世話をする。退行した描画の簡単な発見法は，同年齢の他児の描画水準と比較することである。

各年齢水準における子どもの絵について多くの具体例を挙げてさらに詳しく説明するためには，Rhoda Kelloggの**子どもの絵の分析（Analyzing Children's Art）**[注1)]が優れた資料となる。

各年齢における発達水準

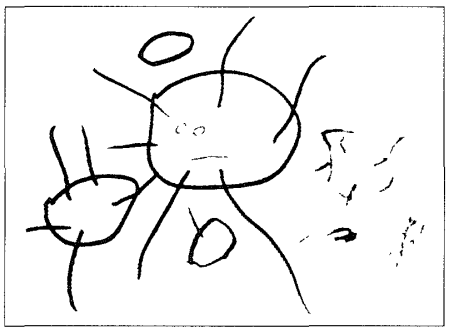
18ヶ月から2歳半

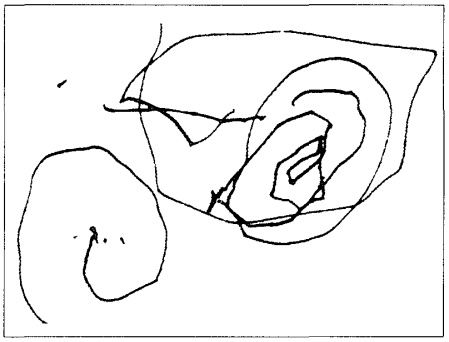
この年齢の描画はほとんどが線とスクリブルである。これらの無目的な描画は第一に運動表現のために使われる。スクリブルは最初点から始まり，次に垂直線，水平線，斜線および曲線などの多用な線で構成される単線へと発達し，さらに曲線や環状線に変化し，最終的に円に到達する。



3 歳児

3歳児は手当たり次第にスクリブルの内部に形を作り始める。次第にこれらの形はあらゆるサイズの見慣れた円や四角になる。3歳児が人間と呼ぶものは，ほとんどが顔の特徴をあらわす円や四角や線の集まりからなる円である。3歳児は考えて描き始めるが，描き終わるまで何を描いているか分からず，描き終わってはじめて何を描いたか話すものである。



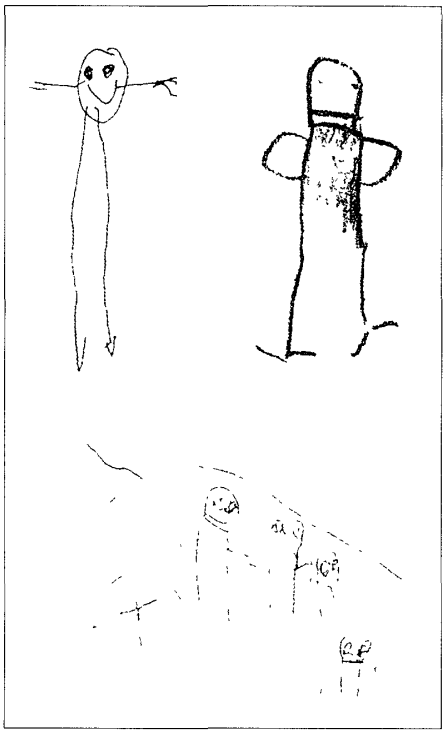


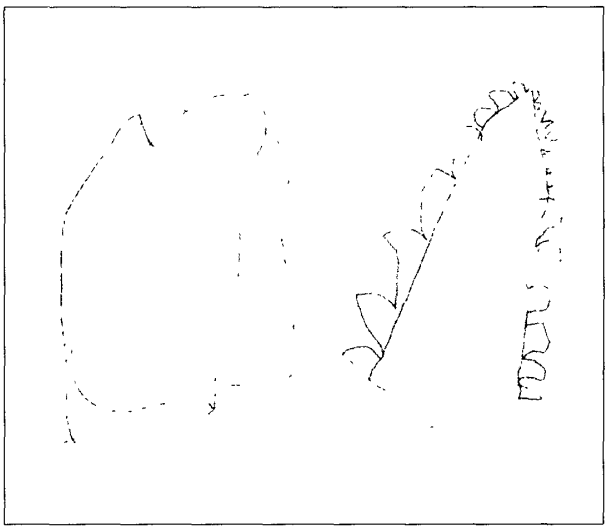
4 歳から 7 歳児

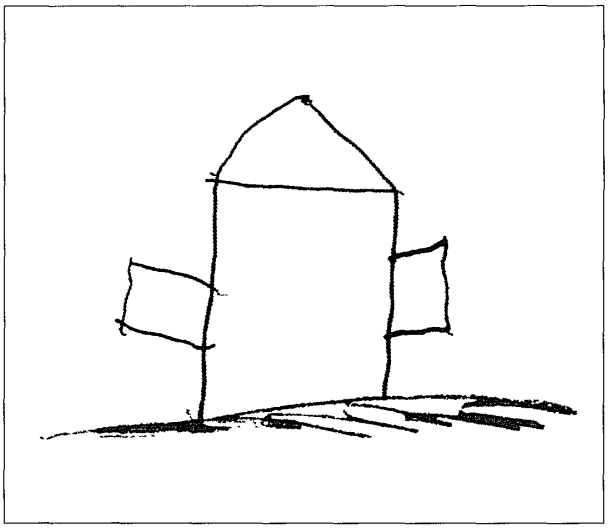
この段階では子どもは簡単な話をしながら絵を描くようになる。子どもは描線の意味を話し始める。そして単なるスクリブルの段階から想像の段階へと移行する。これは主体全体の中の各部分が象徴的に表現される段階である。子どもは形や均衡にあまり注意を払わない。

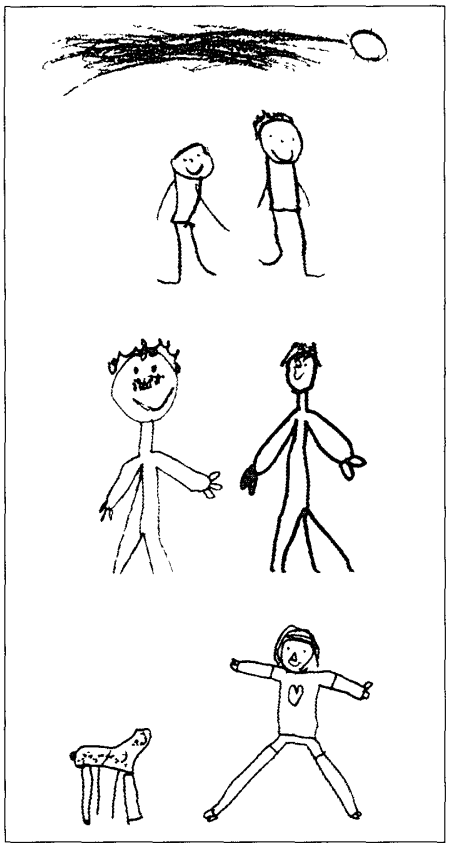
4 歳児

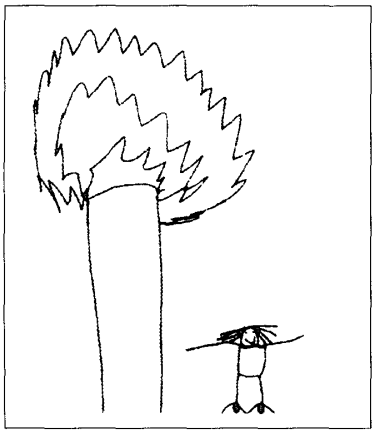
4歳児は円を描いたり，円と線を連結させたりする能力を持っている。4歳児は顔，腕，および脚があり，胴のない「オタマジャクシ人間」を描くことができる。腕や脚はたいてい円から突き出した線である。4歳児はしばしば画用紙の一番上に頭をあらわす非写実的な大きな対象を描いたり，大きな手足を持つ他の対象よりもさらに大きな一つの胴体を描く。性差の意識が生じてくると，それはたいてい長い髪によって表現される。4歳児はサイズや文脈において互いに現実的な関連性のないふたつ以上の対象を1枚の紙に描くことができる。また4歳児は自己の環境，つまり家，木，顔のある太陽，雲および雨を描くことができる。家の内部と外部にある対象は並んで描かれる。





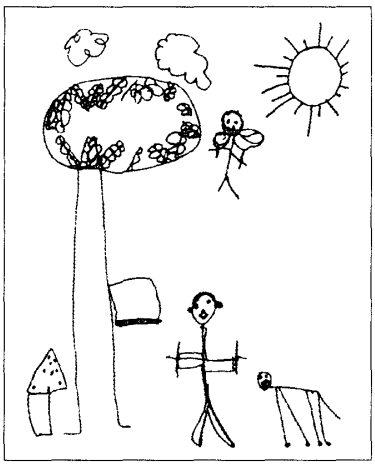


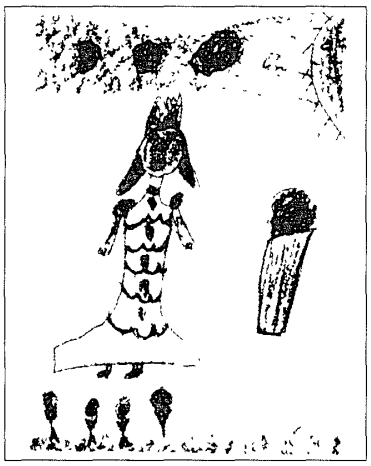




5歳児

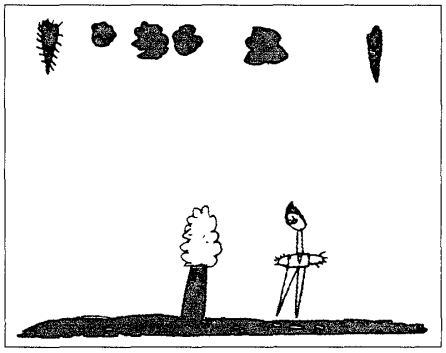
5歳児は体の各部分や髪やまた顔の特徴を付加することによって，より完全な人物を描くことができるようになる。描画は少し写実的に描かれるが，しかし胴体が不均衡に描かれることや，大きな頭，さらに下半身のない胴体は異常とは言えない。描画は4歳児の水準では大きすぎるとは言えない。男児と女児には明確な差が認められる。女児は長い髪を持っており，また一方男児は短い髪を持っている。男児はたいてい女児よりも大きく描かれる。虹，雲[注2]，鳥および周りの対象が描かれる。彩色は非写実的である。

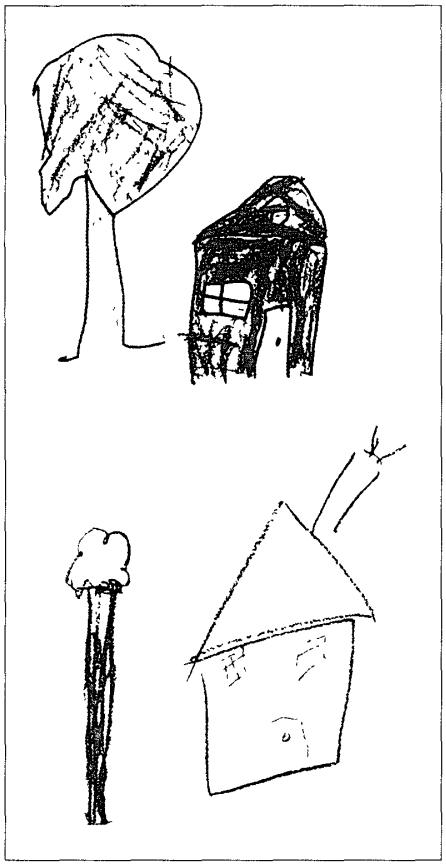


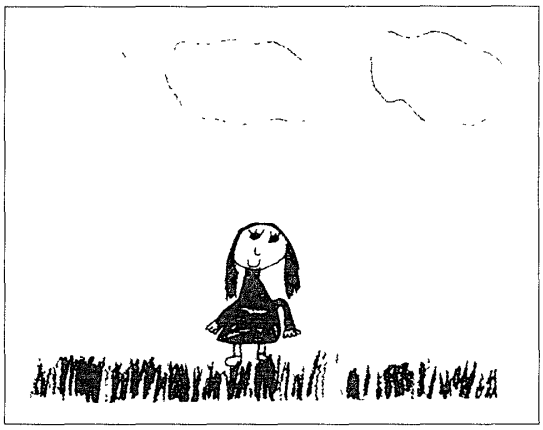


6歳児

6歳児は人，家，そして木の絵を描くことができるようになる。また6歳児は太陽，花，帽子あるいは髪飾りなどの細部を追加して描くようになる。さらに6歳児は各年齢水準に応じたより一層明瞭で表象性のある細部を描きながら次第に写実へと進歩をし始める。6歳児はさらにより写実的に色を使い始める。そしてあらゆる体の部分を描くが，ただしそれらは，たとえば片一方の脚の方が長かったり，かつ/あるいは片一方の腕の方が短かったりする場合がある。6歳児は男児と女児の区別をするために，より一層細部を描くようになる。そして年齢や重要性を表現するために，さまざまのサイズを描くようにもなる。6歳児は憧れや失望などの感情を誇張したり，補償するために，絵に空想を使うこともできるようになる。





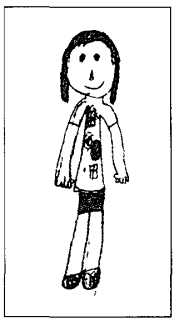


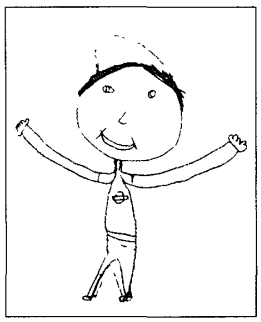
7歳から10歳児

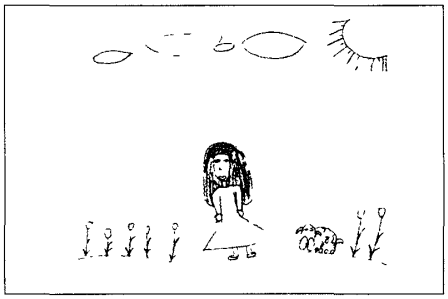
この時期は写実的な表現に対する意識と関心を発達させる時期である。人物は即座に他人に認識できるものとなる。シンメトリー，配置，サイズ，空間使用，および描画対象のための環境構成についての関心が重要なものとなる。たとえば，木は森やあるいは地面のある家の隣に描かれるようになる。さらに環境とつりあった木を描こうとする。子どもが成長するにつれて，描画の写実的な側面はより洗練されて完成されたものになる。7歳児はあらゆる基本要素を備えた家を描くようになる。そこには透明性（固い壁を透視するX線のような力）は見られない。8歳児はその発達した器用さによってカーテン，花，および人物の動きなどの細部を完璧に描き始める。

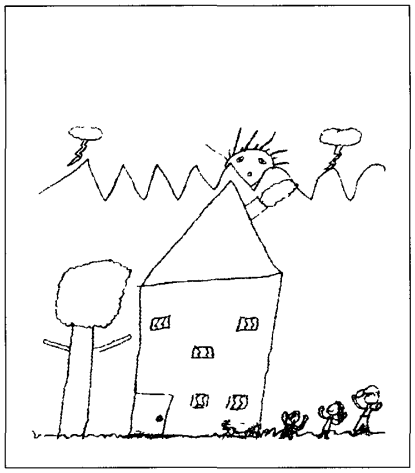
7歳児

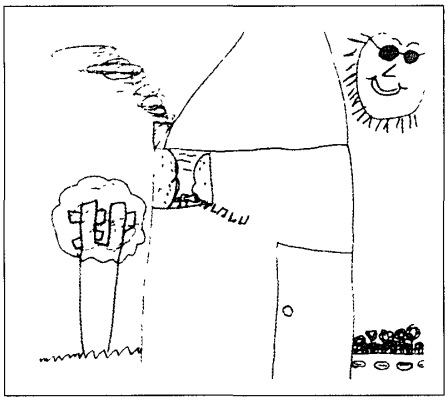
7歳児は透明画を描くことはない。描画は子どもの環境を反映し始め，さらに描画には地平線や水平線が見られるようになる。この年齢の子どもは現実と空想を組み合わせることができる。あらゆる人物は男性か女性かの認識が可能となる。人物は動作を伴わない正面向きに描かれるが，しかしその後動作が表現されるようになる。





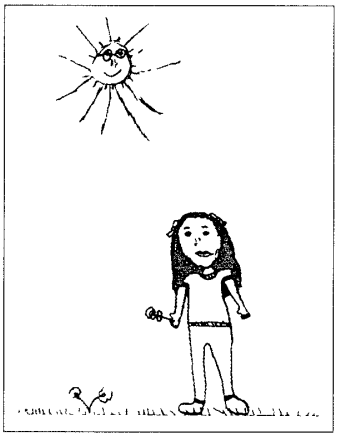


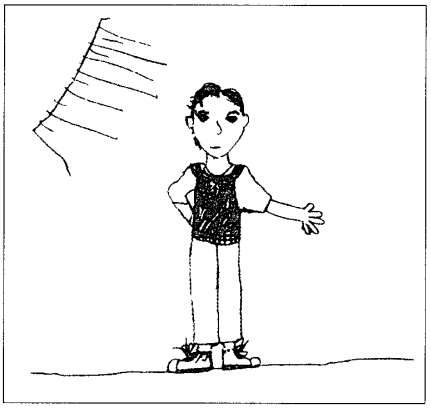


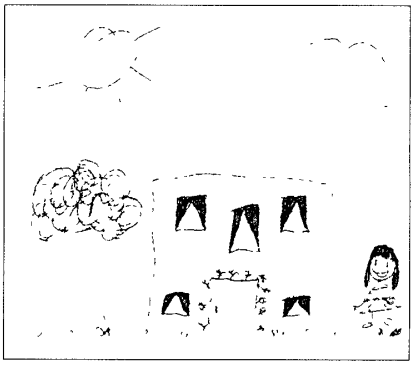


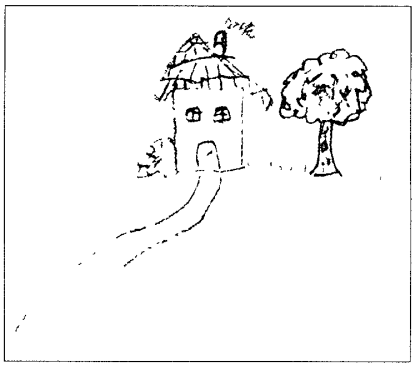
8歳児

8歳児は鉛筆やクレヨンを操作する能力を見せ始め，そして写実的に描くようになる。子どもは指示や質問に対して独創的な反応をするために，自己の想像力を使用することができる。たとえばこの年齢の子どもは，雨の中の自己像，あるいは喧嘩や遊びなどの場面を描いている。子どもはより動きや想像を表現することができるようになるが，しかし同時に描画中の対象との関係における比較的正確な均衡を示すようになる。









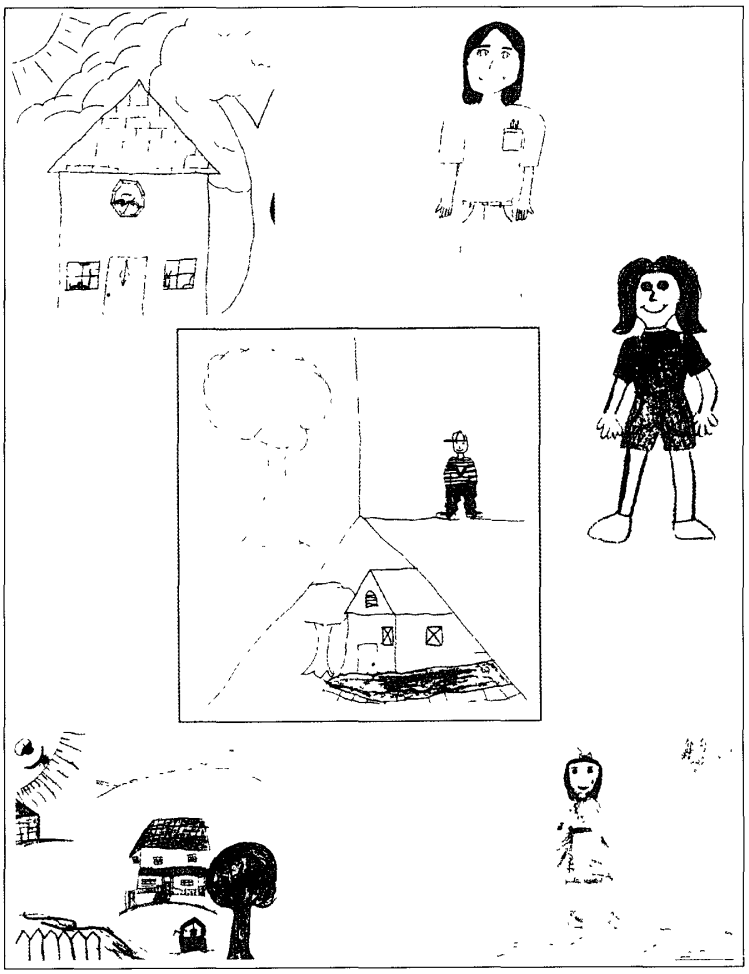
9歳から10歳児

この年齢集団の子どもたちはいろいろの考えを具体的に表現することができるし，さまざまな年齢の人たちを描くことや性別を明確にすることができる。彼らは自己の身体について比較的意識するようになり，青年期前期不安を引き起こす前思春期に非常に興味を示す。二次性徴が現れる。環境における人間と対象は相互に写実的な均衡を示す。対象と人間は正面向きや横向きで描かれるし，また動作も描かれる。基準線は高くなり，地平線はくっきり描かれる。描画には付属物や二次元，三次元，および遠近が用いられる。

9歳

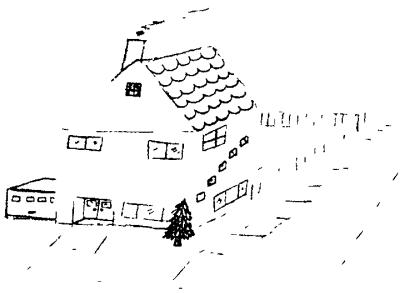
9歳

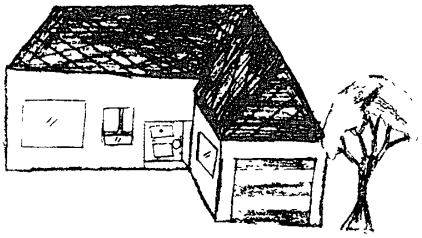
10歳



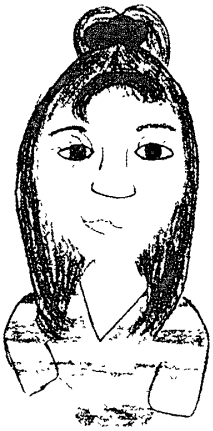
前青年期（11歳から12歳児）

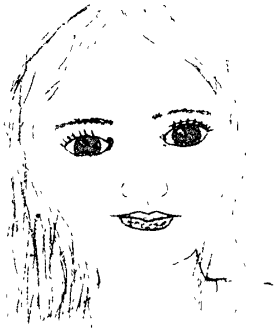
描画は完全に発達したものとなり，細部は写実的でかつ遠近法が取り入れられる。さらにいたずら描きは，発現してくる性的なものに関する子どもの焦点が表現され始める。11歳か12歳ごろには，子どもたちは誇張した性的な特徴を人物画に付け加えるようになる。たとえば，大きくて丸い尻や胸を描くようになる。子どもはこの発達段階における性的同一性への関心を話したり，カモフラージュするために漫画を用いるようになる。



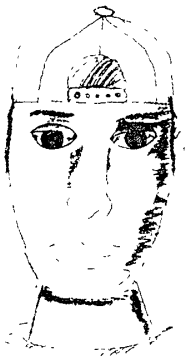


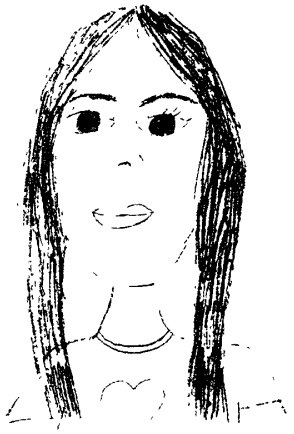
11歳

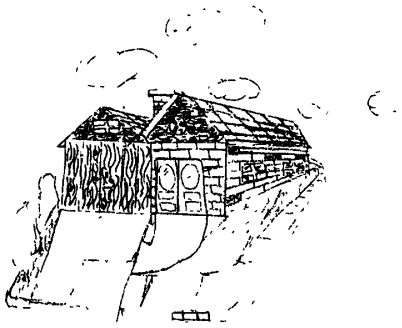


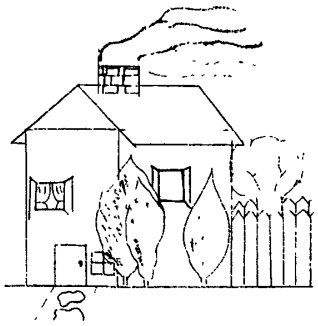


12歳









要　約

子どもの描画を検討するとき，読者はある年齢をその前後の年齢から区分する明確なラインがないことに気付かれるだろう。能力はある年齢から別の年齢へと自然にはみ出るものである。ある能力が後退し，また他の能力が進歩することもある。常識を利用することは重要である。1枚の絵だけで発達水準を決定することはできないということを覚えておくことも重要である。4歳児がある日3歳児水準の人物画を描き，またその次の日に5歳児水準の絵を描くことはある。**しかし，描画のパターンは一定期間にわたって描かれた多くの描画において確定されるはずである。**

このような年齢による発達段階ごとの簡単な記述は，子どもが正常な範囲で描画しているかどうか確定するのに有用な一般的ガイドラインとなる。年少児は時に年長のきょうだいのように描画をおこなうことがあるが，しかしかなり年少の水準でたえず描画をおこなう年長児には観察が必要である。

読者は，子どもの年齢に比べてワンランク上か，もしくは下のランクの描画に遭遇することがよくあると思う。このようなとき，子どもの生活条件，背景，および家族史を知ることは，その子どもがさらに詳しい観察を必要としているか否かを決めるのに重要である。優れた運動能力を持つ聡明な子どもが低い水準の描画を描く場合，その生活状況に十分考慮すべき情緒的なストレスが予想されるかもしれないし，また子どもの行動に何か不適切さが認められるだろう。同じ子どもがほとんどストレスのない安定した状況にあり，かつ描くことが嫌いであるならば，子どもの描く剝き出しの骨や最小人物の描画は子どもに見合った反応と言えるだろう。ただし，この場合，子どもの行動は適切なものであってしかるべきである。

これまでのさまざまな年齢水準の描画例は，各段階の特徴すべてを表しているとは言えない。それらは，単に子どもの描画の進歩と発達水準間の相違を示すに過ぎない。

訳者注釈

注1）邦題は「児童画の発達過程―なぐり描きからピクチュアへ―」(深田尚彦，1971）である。

注2）原著では clown「道化師」となっているが，文脈上，cloud「雲」の間違いと考えられる。

解説文献

Blos, P. Jr. (1972) Silence: A Clinical Exploration. Psychoanalytic Quarterly 61 : 384-363.
(大辻隆夫 訳（1997）沈黙：臨床的探求，児童学研究第27号)

Cantlay, L.(1996) Detecting Child Abuse : Recognizing Children at Risk through Drawings. Holly Press, Santa Barbara, CA. 19-30.
(大辻隆夫 訳（2001）描画分析技法，児童学研究第31号)